

ヤンキー父子姦



R-18 18歳未満でこの本を読むと
進級できずにキモい親父に犯されます

ヤンキー父子姦

ヤンキーになるしか方法はない。失くしたものを取り戻す方法を僕は考えて考えて考えて、そういう結論になった。それしか結論はなかった。その日から僕はもう僕じゃない。オレ、だ。

「お袋よ」

僕は夕飯をかつこみながらさりげなく語りかけた。この女は昔から料理が下手だ。

「オレ、スマホ欲しいんだけど」

母親の箸が止まった。そして僕をまっすぐに睨みつける。

「何に使う気だ」

「友達とメールする」

「学校で会って話せ」

「何だよ！ 大学教授の収入なら余裕だろ！」

「不良少年如きに払う金はビタ一文無い」

「親にはフヨウギムってというのがあるんだろ！」

「その通りだ。だからこうして飯を食わせてやっている」米の水加減もまともに測れない飯を、だろうか。「だが、同時に教育を受けさせる義務もまたある。私はお前に何としても授業をさぼらせないようにしたい。今日も授業をフケたそうだな？」

「授業がつまらないもんで」

これは嘘だ。たとえば数学は、恐らく前回の続きなら図形の証明問題の筈で、僕は三角形

の底辺に下ろされた垂線と、そこに文字通り四角四面に引かれた直角を示す記号に凜とした美を感じずにはいられない。

歴史なら源平合戦のクライマックスシーン。おそらく今日あたりが壇ノ浦。あれだけ栄華を極めた平家が滅びゆく悲哀に僕は、今の翳りを見せた日本を重ね合わせ、人は歴史に学ばねばならないと思う。

「昔は優等生だったのに……」

「うるせえ！ 今でも成績は維持してるだろ！」

「勉強さえできればいいというものではない。社会規範を守って初めて優等生といえる」

「そんな堅物だから親父に逃げられるんだよ！」

「何だと？」母親の眉が吊り上がる。が、口元はむしろ微笑んでいる。そして表情を変えずに片手だけで箸を折るのがいつものパターンだ。これで最大限の脅しがかかけられると信じている。これで何本の箸が無駄になったか。ああもつたいない。でも僕は知っている。母親がこのために、わざわざ強度の低い箸を選んで買い溜めしていることを。

親父……いや、『パパ』は逃げたのではない。追い出されたのだ。あの時のことはよく覚えていて。しかし僕は記憶をすり替えられた人間のように振る舞った。それでもしないと、演技が成立しない気がしたから。母親はここはどう思っているのかよくわからない。

「ごっそさん」僕は箸を置いた。というか叩きつけ気味に置いた。母親と同じく、脅しをかける戦略で。

「飯を残すのか」

「不味くなった」

「お百姓さんが一粒一粒丹精込めて作った米をお前は……」トラクターの存在を意図的に無視した平凡な詭弁だ。「もつたいない」

箸を折っておいてなんという矛盾。これで論理構築の最たるものである学問を教えているのだからおぞましい。

僕も心の中で箸がもつたいないと思いつつも、米を残している。が僕が矛盾しているのはいい。僕が目指すのはヤンキーであり、ヤンキーは悪であり矛盾を気にしない。気にすべきは母親の方で、僕じゃない。

母親は台所で洗い物をしながら、女手ひとつでとか女一代記的な言葉を聞こえるように発しながら悲劇のヒロインをエコロジーに反する水量と洗剤量で演じ続けていた。心が痛まないではないが僕は玄関に向かわなくてはいけない。それもこっそりとはなく、気づかれるように。

「どこへ行く！」

収入の割にあまり広くはないマンションの、対角線を切り裂く声はヒステリックと呼ぶにはあまりに力強く、これなら教壇でもよく通るだろう。しかし振り向きはしない。振り向かずこの音量という点をも称えるべきだが、結局のところ僕のまともな返答ははなから期待しちやいないのだ。

「どこでもいいだろ！」今日の僕の声は大分いい。何度も返した台詞だが、言い始めた頃はどもりと震えがダブルで混じっていた。プロの役者さんが同じシーンを何度も何度も練習す

る理由がよくわかる。

扉は勢い良く閉めたほうがいい、なんて考えていた時期もあったが最近はもう少し自然にしている。背後でパタンと音がして、その金属製の扉越しに微かな怒号が聞こえた気がした。

知之の家は一軒家でいつも親がいない。片親なのはうちと同じだけど居るのは父親の方で、母親の方はうちとは違って死別したらしい。

だからこつそり入ることもなく堂々とチャイムを押す。

中からは仔犬みたいに知之が出てきていらっしやーい、という不良少年を迎えるには健康的すぎるトーンで言う。

「親父さん、今日もちゃんと遅いんだよな？」

「うん、そこは大丈夫」

「貴士も大分着崩しが板についてきたね。顔は温和しいままだけど」「ここに居ると気が緩むんだよ。いつもはもつといかつい顔を維持してるはず」

「はい、今日のノート」

「ああ、いつも悪りいな」

六時間分のノートを、短い時間で書き写す。この後大事なことが控えているから、急ぐ。

「眉いじったんだ」

「ああ。釣り目にはできないからせめて釣り眉にな」

「剃ったほうがヤンキーらしく見えるよ」

「いつでも元に戻れる必要があるんだよ」

僕は手を動かし続けながら言った。これを日中の学校をフケている間に理解する。このサイクルは上手く回るとは限らない。図書館に平日午前にいれば目をつけられるだろうし、適当な場所を探すのが大変だ。それに卒業ができる程度には出席日数が必要だから、昨日のぶんを今日学べるとは限らない。一日分の内容をすつとばしたまま、ノートは取らない態度を貫き、なおかつ授業を理解するのは結構な難題だ。

「そこまでしてさ」顔の前で指を組み、にっこりと微笑んだ知之は言う。「お父さんが大事なんだねえ」

「うるせ……」

貴士はお父さんっ子だねえ、と言っていたのは死んだばあちゃんだ。父方のばあちゃんだから、父ちゃんの母ちゃん。今思えば嫁を思い遣って、もつと母親にも懐いてやりなさいよ、という意味を含ませていたんだろう。当時の僕にそんなことなどわからず、『うん、ぼくパパ大好き!』と答えたのをはつきりと覚えていた。

別に母親が嫌いなものではなかった。ただ父親が好きすぎてたまらなかった。好きすぎることで家庭がホウカイするなんて、当時の自分には想像もつかないことだったんだ。

「そろそろ時間？」知之が察する。

「ああ」オレ、ではなく僕は答える。「無断外泊してくるよ」

「行ってらっしゃい。楽しんでね」

無断外泊はヤンキーにならないとできないのだ。僕は無断外泊をするためにヤンキーになつたんだよ。

隠し持っている合鍵を持って差し込んだ部屋の明かりはついていなかった。まだ残業かな。直後背後から抱きしめられた。

「パパ！」

「たーかし」

「ねえ、この前テストで百点取ったんだよ！」

こんな姿、学校の奴らにはとても見せられない。

「じゃあご褒美だな」パパの手がだんだんに下に降りてきて、僕の股間に伸びてくると、僕の心臓はバクバクしてきて、おちんちんにどんどん血流が流れ込んできているのがわかる。

パパ！ もっと触ってほしい。僕は自主的に社会の窓を開けて、タイマンを張っているくせにまだ毛も生えていないおちんちんをパパの手に握らせた。まだ僕のは皮も被っているし、格好悪いことこの上ない。本当はパパみたいに早くになりたいけれど、パパは僕のそんなおちんちんが大好きだつて言う。でも僕は毛むくじゃらで太くて脈打ってるパパみたいなおちんちんの方がずっと魅力的だと思うし、パパだつてそう思うんじゃないかな。

まだ玄関だというのに、僕はパパの正面に向き直つて精一杯背中を反らして唇を尖らせ、パパはそんな僕の唇を割って深くに舌を差し込んでくる。パパの唾液の味、大好き。

「シャワーを浴びようか……」

「やだ。このままベッドがいい」

「おい……パパ、汗かいてるぞ」

いつもシャワーを浴びてからやるのが習慣だけど、今日はもっとパパの濃い匂いを嗅ぎたかった。

ベッドルームでパパは背広を吊るさずに脱ぎ、ワイシャツを捨ててゆく。するとパパの胸毛の濃い、均整の取れた身体が現れる。それだけで僕の勃起はますます大きくなってゆき、僕もすっぽんぽんになる。

「パパ！」

パパの胸毛に頬をこすりつけるととても動物的な匂いがした。もし僕が大きくなったら、ヒゲがじやりじやりしちゃうから、もしかしたら僕も小さなままでいいのかもしれない。僕はさらに上ににじりよって、パパの唇にキスをした。今度は僕から舌を差し込みパパの口の中を味わうと、僕は仰向けになり、アナルを指先で拡げてパパに示した。

「ねえ。パパ。挿れて」

「まだ。濡らしてからだ」

僕は唾液を僕の指にたっぷりと塗り、それを下の穴に上手に移して湿潤を確保した。滑らかさを示すために自分の指を差込んで見せた。それはすっかり慣れていて簡単に僕の指を三本飲み込んだ。自分のアナルの中で自分の指を動かすリズムに合わせて、パパのペニスがび

くり、ぴくりと上に動く気がした。僕はそのペニスにもかぶりつき、ねっとりとするくらい唾液を与えた。先端からは大好きなカウパーの匂いがした。

ついにパパのものが侵入してきた。僕はこの、まず空間が空いて次いでそれが満たされる一瞬が好きだ。冷たい空気が熱くて肉感のある棒に入れ替わる。

「す、すごい、パパが入ってくるう！」

腸の中をかき回されると、快樂それ自体をかき回されてるみたいで何十倍にも増幅される。僕の中でパパの亀頭がとても良いところに当たっている。僕はまるで気が狂ったみたいにその亀頭と僕がこすれ合うように腰を動かしてしまう。パパ。パパ。とつても気持ちがいいよ！

僕の中にぴゆるるると、パパの熱い液体が入ってきて、僕は本気で妊娠したいと思う。もし女の子に生まれていたら、僕は世間が何と言おうとパパの子供を産んだのに、悲しいことに僕は男だ。同時に僕の前からも液体が出て、パパと僕のお腹の間にねっとり挟まれる。あの事件の時にはまだ出なかったやつだ。

「ねえパパ。今夜、泊まっていい？」腕を頭の後ろで組むパパの胸に顔を埋めて僕は訊く。

「もちろんだ。ママには何て言っているんだ？」

「友達の家泊まる、でいつも通用してるよ」

「なら大丈夫だ。ただ明日の仕事に差し支えない程度にな」

「今夜は寝かさないよ」僕はパパにキスをした。